

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.84

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

掌中の珠『木の葉文典』と手塚律蔵

上杉 進

嘉永4年(1851) John Mung は命を賭して帰国した。ハワイのデーモン牧師を筆頭に善意の人々からの贈物の中の一点 *The Elementary Catechisms, English Grammar, 1850* は、優れものであった。この小冊子を手塚律蔵が翻刻をした。司馬遼太郎が『胡蝶の夢』の中で「江戸で英語の専攻者は奇跡的だが一人いた。手塚律蔵である」と書いている。律蔵はこの本を中浜万次郎から借用し、本邦初の英語英文典『伊吉利文典』を翻刻した。出来上がった本は92頁(Appendixを含む)のものとなった。この翻刻本は幕末明治初期の英学徒の必須の教科書となり、日本文化進展のエンジンとなった。

原本の大きさは(13.3×8.8cm)木の葉のごとく小さく、手のひらに載るくらいであったから『木の葉文典』という愛称が生まれた。翻刻本は出版年代により大きさに多少の差があるが、早稲田本は26×18cm、和紙左袋とじ、筆記体の木版刷りである。構成はPart IのintroductionからPart VIのprosody、それにAPPENDIXがつく。一応英文法の要件を備えている。この本は1850年LondonからHawaiiを経由して1851年に我が国に到来した。

「掌中貪り見る一珠の新たなるを」一つの文法事項を見れば新しい世界が見えてくる。さらに一つ、もう一つと見ていくと知的水平線は広がり、今まで見えなかったものが見えてきて、新しいものの見方が生まれる。英学徒はあくことなく掌の『木の葉文典』を見たことであろう。受験期の筆者も『赤尾の豆単』を握りしめていたことを思い出す。

天保11年(1841)に天文方見習い渋川六蔵が和蘭英学書から『英文鑑』を翻刻する。幕命により英学を開始して実に30年である。一方、手塚律蔵の翻刻は文久2年(1862)で、本邦初の英語英文典である。なりは小さいが、大きな志が秘められていた。月刊誌 *The Family Economist* (Groombridge & Sons)の編集者たちは教育環境が恵まれていない家庭の子供たちの学校や家庭での教育のために、この雑誌の第一級の執筆者によって廉価版のテキストを作るというのである。編集方針は, completeness, precision, simplicity であり、タイトルの catechisms には教義問答という意味と入門書という意味があり、成程とうなずける。Victoria 朝の英国は産業革命の成果により世界の工場となり、七つの海を支配していた。1851年の世界初の万博では経済力の偉大さをみせつけたが、一方貧窮家庭も少なからずあった。学習法は対話形式で学習者の目線まで下りて語っている。Q. What is grammar? A. Grammar is the system or body of laws and rules by which we express thought in correct language. という塩梅である。英語黎明期の英学徒には評判も上々、版を重ねた。

郷土の生んだ語学の巨人手塚律蔵(1823-1878)は周防国熊毛郡小周防生まれ、現在の光市小周防である。医師の手塚治孝の二男で長兄と父の手伝いをしていたが、17歳の時長崎行きを決断、4年間高島秋帆に砲術と蘭学を、21歳から江戸で坪井信道に蘭学と西洋医学を学ぶ。嘉永4年佐倉藩主堀田正睦に請われ出仕。蘭学教官として活躍。江戸に又新堂を開き、蘭学を教え、英学を独習した。英語塾の門下生から西 周、神田孝平、津田仙など優れた英学者を輩出した。脱藩中の西 周を自らの義弟として蛮書調所に入れ、翻刻を共に行った。また蛮書調所の同僚寺島宗則の勧めで外務省へ入る。明治6年(1873)ロシアのウラジオストクに外務省七等出仕貿易事務官として駐在、日露の貿易の振興に尽力した。帰国の船上で病死する(明治11年1月29日)。享年57歳。青山霊園に眠る。周防の地でこの秀逸な語学者を追って、浅田栄次、石田憲次、岩崎民平が現れたことは実に意義深い。

*『伊吉利文典』の内容等は早稲田大学図書館のホームページを基にした。

English speech, the sea that receives tributaries from every region under heaven —Emerson.

(中国・四国支部 副支部長)

日本英学史学会中国・四国支部 平成27年度第2回(通算第73回)研究例会(福山例会)のご案内

日時: 2015年12月12日(土) 13:30 受付開始

会場: 学校法人 福山大学 宮地茂記念館

〒720-0061 広島県福山市丸之内1-2-40 TEL: 084-932-6300

(JR福山駅北口より徒歩2分、ベッセルイン福山駅北口の東隣)

本年度第2回(通算第73回)研究例会を、12月12日(土)、学校法人福山大学宮地茂記念館(広島県福山市)にて開催いたします。開催にあたり、顧問(相談役)の小篠敏明先生に格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。

今回の研究例会では、小篠敏明先生のご講演、ならびに河村和也先生による研究発表が予定されています。会員の皆様にはぜひ福山の地にご参集いただきますよう、ご案内申し上げます。

研究例会のあとには、忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

アクセスは右の図を参照。バルーン^①の位置が会場です。

(アクセスマップは福山大学ウェブサイトより)



プログラム

開会行事 (14:00-14:10) 支部長挨拶

講演 (14:10-15:20)

「歴史研究と ICT 技術の交わり—英語教育史研究のひとつの姿—」

小篠 敏明 (福山平成大学)

ある古墳で錆びた鉄製の刀剣が発掘される。しかし、この刀剣は古墳の湿度に長期間さらされていたため、ぼろぼろに錆びていて、どうにもならない。資料的価値は皆無。少なくともはじめはそう見られていた。ところがこの刀剣にレントゲン線を当ててみると文字が鮮やかに浮かび上がってきたではないか。この文字によりこれまでわからなかった多くの歴史的事実が浮かびあがってきた—これは歴史研究と先端技術の交わりを示すひとつのエピソードである。最近の私の研究はこれには毛頭及ばないが、少なくともこの方向を目指していることだけは確かである。

自分たちの力で自分たちにあった自分たちのための教科書の英文難易度(リーダビリティ)測定ツールを作り出す。自分たちの感覚に合った「物差し」を作り出す。そしてその物差しで教科書英文の難易度を測定し、比べることができたら、どれ程わかりやすいだろう。このような問題意識から、新しいリーダビリティ指標開発に取り組んできた。そして今や Ver. 3.4.2nhnc1-5 の開発まで進めることができた。

この度、新たな共同研究組織を立ち上げ、歴史教科書英文の難易度を自作ツールで測定し、歴史資料に ICT の光を当てる研究を始めた。とりあえず、Union R, National R, Denning R 等、9種類の教科書のリーダビリティ分析から初めた。

この研究はまだ緒に就いたばかりであるが、可能性に満ちていると感じている。当日は私たちの一番ホットな研究についてひとつの話題提供ができればと思っている。

(休憩 15:20-15:30)

研究発表 (15:30-16:40)

「新制高等学校発足期の入学者選抜における英語の位置付けについて：高知県を例に」

河村 和也 (東京電機大学)

新制高等学校の発足期、入学者選抜における学力検査の扱いが都道府県ごとに異なっていたことは周知の事実である。中でも、中学校で選択科目とされた英語の位置付けは特にさまざまであった。高知県では、この時代に公立高等学校への「全入制」を実施しており、学力試験としてのアチーブメント・テストや入学者選抜の資料としての学力検査について、その功罪が喧しく議論されていた。この発表では、その過程で英語がどのような位置を占めたのかを探ってみたい。

閉会行事 (16:45-17:00)

副支部長挨拶, 写真撮影

懇親忘年会 (17:30-19:30) (福山駅周辺の会場を予定, 会費 5,000 円程度)

福山例会のご出欠について

※例会および懇親会のご出欠をお知らせください。同封の参加申込用紙の内容について、12月3日(木)までに、メール、ファックス、郵送のいずれかでご回答くださいますよう、お願いいたします。

事務局連絡先 メールアドレス: eigaku@tom.edisc.jp

F A X 番号: (0824) 74-1725

郵 送 先: 〒727-0023 広島県 庄原市七塚町 562 県立広島大学 馬本研究室内
日本英学史学会 中国・四国支部事務局

※例会当日 12:00 より、理事会を開催します(福山駅近くで昼食をとりながら開催)。理事の皆様には、別途ご案内をお届けいたしますので、こちらのご出欠も合わせてお知らせください。

福山のご案内

JR 福山駅北口の福山城公園内および周辺には、広島県立歴史博物館、福山城博物館、ふくやま文学館、ふくやま美術館など、多くの文化施設があります。また、坂本龍馬や朝鮮通信使にゆかりの鞆の浦は、福山駅からバスで30分のところにあります。

例会の前後にお時間があれば、ぜひ福山での英学史散策をお楽しみください。

(詳しくは、福山観光協会ウェブサイトをご覧ください。http://www.fukuyama-kanko.com/)

英学史情報ひろば

◇原武 哲ほか(編)(2015).『夏目漱石周辺人物事典』再版, 笠間書院(初版は2014年).

★本支部幹事の隈慶秀先生が執筆者のお一人として加わっておられます。

◇第182~183回「広島ラフカディオ・ハーンの家」ニュース(2015年10月~11月)

◇<明治の国際人>浅田栄次生誕150周年記念祭「浅田栄次に還れ!」(2015年10月17日, 周南市立徳山小学校にて)

◇藤井 哲(2015).『福原麟太郎著作目録』九州大学出版会.

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般3,000円、学生2,000円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願ひいたします。

(口座番号) 01360-9-43877

(加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

>> 『英學史論叢』第19号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第19号(2016年5月発行予定)の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、『英學史論叢』第18号、ニューズレターNo.83、ウェブサイトに掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

<http://tom.edisc.jp/eigaku/tokokitei.pdf>

・研究論考・研究ノートを投稿予定の方は、事前に「投稿申込」をお願いします。2016年1月31日までに事務局へ、メールまたはファックスにてお申し込みください。

メール: eigaku@tom.edisc.jp

ファックス: 0824-74-1725

・原稿提出の締切は、**2016年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等は1部お送りください。

広島英学史の周辺(50) 前号「英学史情報ひろば」に掲載した外山敏雄著『<明治から昭和まで>日本の英語教育を彩った人たち』(大修館書店、2015年)を一気に読了した。面白い! ▼英語教育史を専門的に扱う書物を「面白い」と私が感じるのは不思議ではないが、英語教育を外から眺める人たちも、本書に興味をそそられることだろう。著者の出身地・北海道にゆかりの人物を中心に、学校、辞書、雑誌、古書などが織りなす様々なエピソードを通じて、古き良き時代の英語教育を浮き彫りにしていく。著者が「札幌農学校草創期の英語人脈につらなる裾野は豊かに広がっている」(p.198)と述べるように、その影響の大きさを痛感する。英語人につらなる資料を集め、彼らを追い、「生(せい)のドラマ」(p.iv)を描き出そうとする著者の思いが、本文中の写真や挿絵からもじわじわと伝

わってくる。カバーのデザインも象徴的だ。▼著者の取り上げる人物の中に、中国・四国にゆかりの英語人たちがいる。広島高師で学び、小樽高商で教えた濱林生之助。北海道に生まれ、呉中学校で教えた田中菊雄。『英語青年』を創刊した武信由太郎、*Japan Times*を創刊した頭本元貞はいずれも鳥取県、『英語青年』を武信から引き継いだ喜安璣太郎は愛媛県の出身である。このほか、清水春雄、木方庸助、藤田仁太郎、小日向定次郎、須貝清一、井上十吉、石田憲次など、多くの人名を目にする。福山出身の福原麟太郎も忘れてはいけない。本書中に記された「英語人」がいったいどれくらいにのぼるのか、総数を数える衝動に駆られてしまう。▼私は、英語教育史関係の書物に出会うと、私家版の年表の改訂作業を始める。たくさん固有の年表が年代とともに出てくると嬉しくなる。しかも本書のように、西暦と元号が並記してあるのはとてもありがたい。年表の改訂作業は、固有の年や項目の記述を充実させるだけではない。年表を眺め、そこに記された事柄の前後関係から「何か」を読み取る材料が補強される。本書の終章で展開される時代区分は、事柄の連鎖から「時代の変化」を読み取り、その特徴を一言で表現したものだ。▼中等教育が明治30年前後を境に「訓読」から「文法・翻訳」期へと変わる根拠として、「教室でおこなわれる訳読(翻訳)が以前の時代よりも質的に向上する」(p.209)ことを挙げている。私は当時の独習書を研究中だが、独習書の記述に質的な変化が見られる時期と重なる。▼良いテレビドラマは、見終わった後に原作が読みたくなる。視聴者の側に、良いものを伝えてくれた作り手に近づきたいという内的変化が生じるからだろう。同様に、良い本は読者の心に化学反応を引き起こし、著者が執筆中に手にしたであろう参考文献へと向かわせる。私は本書の読書中に、福原麟太郎『チャールズ・ラム伝』を棚から引っ張り出し、苦米地英俊『商業英語通信軌範』、清田昌弘『一つの出版史』を古書店で購入した。▼ふと、本の背の「彩った」に目が止まった。読後に語りたくなる本は、日々の研究活動の彩りとなる。▼では皆様、福山でお会いしましょう。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.84

2015年11月22日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74-1725(直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.84